研究プロジェクト成果報告書

研究主題　　　学び合う研修ネットワークの構築

研究期間　　　平成 22 年度～平成 23 年度

研究代表者　　学校教育学系　准教授　水落　芳明

研究組織	研究協力者	上越教育大学教職大学院	教授	松沢　要一
		上越教育大学教職大学院	教授	西川　純
		上越教育大学教職大学院	院生	
		平成２２年度	Ｍ２	小林　克樹
				竹内　智光
				柴田　卓也
		平成２３年度	Ｍ２	田中　博徳
		新発田市立五十公野小学校	校長	皆川　孝
		新潟市立真砂小学校	教諭	大島　崇行

学び合う研修ネットワークの構築

上越教育大学　　水落　芳明

Ⅰ　はじめに

学校現場では、社会的構成主義や状況論的アプローチ等、学習者が他とのかかわりによって学ぶ授業の成果が発表され[1]、全国国立大学の教員養成学部附属小学校における研究テーマに「学び合い」や「対話」等、学習者同士がかかわり合って学ぶ授業を研究テーマにしている学校が全73校中17校（約23%）と注目を集めつつある[2]。中でも『学び合い』については、インターネット等を通じて急速に全国に広まりつつあり、毎週のように全国のどこかで『学び合い』研修会が開催されている[3]。

しかし、こうした取組のほとんどは一部の教師による個人研究であり、学校全体で取り組んだとしても職員の異動等で研究が継続できない等の問題が発生している。これは校内研修の研究成果を外部に公開したり、他校と交流したりしながら研究を進める体制が整備されていないことに起因している。研究会等で一時的に公開される授業研究に代わり、学校の壁を越えて共通のテーマで協働で校内研修を進めていく体制整備が急務である。

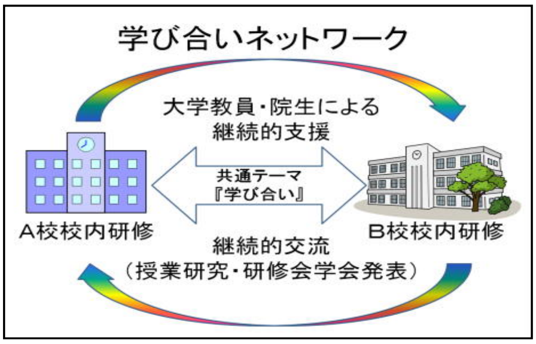

図1　学び合いネットワーク図

そこで本研究では、図１に示すように『学び合い』を研究テーマとする複数の学校に共通してかかわり、それぞれの研究をサポートするだけでなく、それぞれの教員同士を派遣し合ったり、継続的に授業研究を公開し合ったりしながら研修できる体制を構築し、その効果を検証することを目的とする。

Ⅱ　成果

本プロジェクトによる成果は、「Ｗｅ（みんな）でつくる学校」(2011)[4]、「Ｗｅ（みんな）でつくる学校Ⅱ」(2011)[5]により報告されている。ここでは、その一部を紹介する。

1　学び合う授業モデルの構築

学び合う授業のモデルとして、新発田市立五十公野小学校では、学習課題を２段階に設定し、習得を目指す課題を第１課題、活用を目指す課題を第２課題としてそれぞれ設定し、図２に示す授業モデルを開発した。

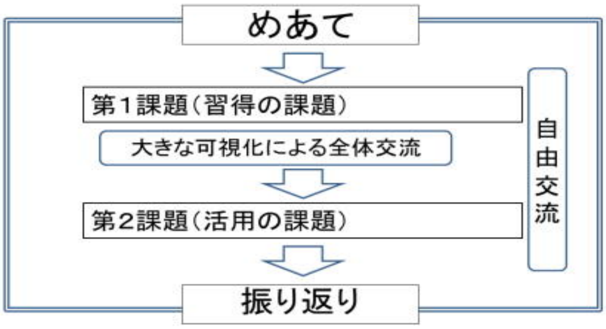

図２　学び合う授業モデル図

これは、学校の教育目標や各教科で学ぶ目的、そして本時のめあてを学習

者に示すことから始まる授業モデルである。授業ではまず、めあてに基づいて習得のための第 1 課題を設定する。ここでは、学習者同士がそれぞれの意思で自由に交流しながら学び合うことが保障されている。教師は、学習者の多様な学習の様子を評価しながら、学習者にとって有用な情報を見えるように工夫する。これが「大きな可視化」である。方法は様々で、学習者の発見した解決法のポイントを画用紙やホワイトボード等に書いて掲示したり、ポイントを簡潔に学習者全員に聞こえる声で説明させたりする。この「大きな可視化」が一般的な授業スタイルと異なるのは、ここで可視化される情報を受信するかどうかの判断が学習者自身に委ねられている点である。学習者が自分にとって有用と判断すれば注意深くその情報を聞き取るし、自分にとって有用ではないと判断すれば、無視することができる。

およそ、第 1 課題の制限時間は 10 分～20 分程度で、時間進行の様子はタイマー等で学習者に可視化され、学習者は残り時間を計算しながら、自分やクラスメイト全員にとって最も効果的と判断した学習法を選択しながら学習を展開する。制限時間に達すると、第 1 課題をクリアできたかどうかを確認し、活用のための第 2 課題へ進む。この課題は本時のめあてと直結しており、制限時間終了時には学習者全員が課題達成できたかどうかを全員で確認する。全員が達成できた場合は、みんなで喜び、全員が達成できなかった場合は、みんなで反省する。これが「振り返り」である。

こうした授業モデルでは、課題設定が授業づくりの１つのポイントとなる。「Ｗｅ（みんな）でつくる学校」(2011)[6)] に示された課題のレベルを表１に示す。

表１　課題のレベル

ア	既習事項を使うと道の問題が解決できるような課題
イ	「できた」ことによって新たな法則や決まりが発見できる課題
ウ	知的好奇心を刺激する新たなパターンで出題される課題
エ	子どもの言葉に近い表現で表された課題
オ	二者択一的な課題

表１に示された課題レベルのうち、「オ　二者択一的な課題」に関する効果は、五泉市立村松小学校におけるの研究[7)] による成果を発展させたものである。五十公野小学校では、こうした研究を２年間にわたって継続的に展開することにより、教師の授業観に変化があったこと等を報告している[8)]。

2　可視化

前述した学習モデルによって学習を展開する際、子どもたちの学び合いを加速させるツールとして機能するのが「可視化」である。前述した「大きな可視化」の他に、学習者のがんばりを教師が発見し、その良さを周りに伝えるつぶやきであったり、様々な解法を選択している学習者を紹介するつぶやきなどである。

しかし、本プログラムでは教師による可視化以外に学習者自身が行う可視化に関する効果が認められた。学習者同士が話し合う中で、それぞれ異なる解法を発見すると、自発的に画用紙等にポイントをまとめ黒板に掲示する方法や、赤白帽子によ

って、その時その時の学習状況を可視化する方法等である。課題を解決した学習者は帽子の色を白に、誰かに手伝ってほしい場合は帽子の色を赤に、一人で考えたいときは帽子をかぶらない、といった具合である。これによって学習者は誰と交流すればよいのかを効率的に把握し、課題の全員達成を目指していくのである。

この学習者による可視化は、まず村松小学校で開発され、五十公野小学校で赤白帽子による可視化へと発展し、他の学校へ伝播させることができた。本プロジェクトの成果である。

Ⅲ　今後の課題とお礼

本プログラムを実施する上で特筆しなければならないのは、五泉市立村松小学校、新発田市立五十公野小学校の先生方、子どもたちの献身的な協力である。彼らと共同で研究を進めることがなければ、こうした成果を得ることはなかった。この場をお借りして感謝を申し上げたい。また、本プロジェクトで得られた知見は、教職大学院院生の研究へと発展し学会等で発表したほか、学会誌にも掲載されている[9)10)]。こうした取組が今後ますます波及し、新たなネットワーク構築へと繋がっていくことを期待してやまない。

Ｖ　本調査研究と一部関連した内容の投稿等

本調査研究のキーワードの一つは「学習者の学び合い」である。これに関連する学会発表、論文を以下に記す。

○学会発表

１　竹内智光・柴田卓也・水落芳明：相互評価を生かした主体的な学びを導く学習過程の在り方についてー小学校の体育授業分析を通してー，日本教科教育学会全国大会
　日時：2011 年 10 月３日　　会場：弘前大学

２　小林克樹･水落芳明:教師の協働がもたらす研究授業協議会に関する事例的研究，日本教育実践学会全国大会
　日時：2011 年 11 月７日　　会場：上越教育大学

３　若月利春・水落芳明：仮説設定場面における「４ＱＳワークシート」を用いた学び合いに関する事例的研究，臨床教科教育学会全国大会
　日時：2011 年１月８日　　会場：群馬大学

４　吉井理人・林俊行・水落芳明：小学校社会科『学び合い』における学習者同士の「可視化」の効果に関する事例的研究，臨床教科教育学会全国大会
　日時：2012 年１月７日　会場：信州大学教育学部

５　伊藤修也・水落芳明：「目標と学習と評価の一体化」をした英語の授業実，臨床教科教育学会全国大会
　日時：2012 年１月７日　会場：信州大学教育学部

６　林俊行・水落芳明：小学校外国語活動におけるタブレット型端末活用の効果に関する事例的研究ー英語劇シナリオづくりにおける音声認識翻訳活動を通して

ー，臨床教科教育学会全国大会
日時：2012 年１月７日　会場：信州大学教育学部

○論文

1　竹内智光・柴田卓也・小林克樹・水落芳明：体育科における付箋による相互評価に関する事例的研究－小学校６年生「陸上運動」の実践から－，臨床教科教育学会誌，臨床教科教育学会，11(1),pp.21-30,2011.5

2　伊藤修也・冨田憲太郎・水落芳明：学習者による「目標と学習と評価の一体化」の効果に関する事例的研究－中学校１年英語文法学習を通して－，臨床教科教育学会誌，臨床教科教育学会，12(2),印刷中

（参考・引用文献等）

１）水落芳明・西川純：コンピュータの操作スキル獲得における児童の相互作用の役割に関する事例的研究－　現職院生と研究者による現場教員への支援－，全国教職大学院年鑑 08-09,教育開発情報センター，pp.59-67，2009.

２）全国国立大学附属学校連盟・副校園長会：副校長名簿・研究テーマ等一覧、2006.

３）『学び合い』ポータルサイト：http://manabiai.g.hatena.ne.jp/,（２０１２年３月３０日閲覧）

４）水落芳明監修・新発田市立五十公野小学校：「Ｗｅ（みんな）でつくる学校」, 2011.

５）水落芳明監修・新発田市立五十公野小学校：「Ｗｅ（みんな）でつくる学校Ⅱ」2011.

６）前掲書５）pp.21-24.

７）水落芳明監修・五泉市立村松小学校：「Ｗｅになった学校」pp.75-108，2009.

８）前掲書５）pp.209-213.

９）竹内智光・柴田卓也・小林克樹・水落芳明：体育科における付箋による相互評価に関する事例的研究－小学校６年生「陸上運動」の実践から－，臨床教科教育学会誌，臨床教科教育学会，11(1),pp.21-30,2011.5

10）伊藤修也・冨田憲太郎・水落芳明：学習者による「目標と学習と評価の一体化」の効果に関する事例的研究－中学校１年英語文法学習を通して－，臨床教科教育学会誌，臨床教科教育学会，12(2),印刷中